有明町埋蔵文化財調査報告第 3 号

昭 和 60 年 度

大野原遺跡発掘調査概報

昭和60年11月

有 明 町 教 育 委 員 会 大 野 原 遺 跡 調 査 団

大野原遺跡の発掘調査概報目次

目	次		
1,	調査に至る概要	P	2
2,	調査概要	P	3
3,	層序	P	3
4,	遺構。遺物	P	4
5,	結び	P	6
6、	附 図		
1	、大野原遺跡発掘調査地	P	8
2	、昭和60年調査トレンチ	P	9
3	、第1-1 トレンチ埋葬遺構実測図	P	10
4	、第1-2 トレンチ祭祀遺構実測図	P	11
5	、第3トレンチ遺構	P	1 2
6	、第1トレンチ地層断面図	P	1 3
7	、第2・第1トレンチ地層断面図	P	1 4
8	、第3トレンチ地層断面図	P	1 5
9	、第4トレンチ地層断面図	P	16
1 0	、第1トレンチ出土土器	P	17

11, 4

13 4

14 4

12、第3トレンチ出土土器

附表 大野原遺跡調査団組織表

15、第3トレンチ出土石器。石鏃

P 18

P 19

P 2 0

P 2 1

P 2 2

P 2 3

古田 正隆 諫見 富士郎 安弘

1、調査に至る経過概要

大野原遺跡は長崎県南高来郡有明町大三東にあり、有明海に面した雲仙山麓の末端台地に立地する。標高約20Mのこの大野原台地は、早くから弥生土器片や石器、石片など遺物の散布地として知られ、その規模は10数へクタールにも及ぶ。

昭和33年、発掘地に隣接する畑地より、午ぼう収穫時に大型合口かめ棺の出土を見 遺跡地として確認調査が望まれていた。

昭和34年、国見高校考古学研究部が、かめ棺出土地点周辺の発掘調査を行い、土壙墓3基と、支石墓に類似する巨石蓋土壙墓を発見したが、出土遺物から、遺跡地は弥生前期末から中期にかけての埋葬遺跡であることを考察した。(註1)

遺跡台地一帯は、深い火山灰に覆われ、島原午ぼうの特産地を形成しているが、農業の機械化がすすむなかで午ぼう収穫時に使用する掘削機トレンディガーは、最深1.5Mの地層までくり抜き、完全に遺跡破壊を進行させている。

切りさかれた多量の遺物が、台地全般に散乱し、畑地周辺に投げ捨てられている。

昭和59年、有明町では、町史編纂事業の一環として、遺跡保存対策もふくめ、第2次の大野原発掘調査を実施した。(註2)調査は、第1次調査で発見し、そのまま埋め戻し保存した巨石蓋土壙墓の再確認を主目標としたが、第2次調査では、遺構周辺地点からあらたに3基の合口かめ棺を発見した。かめ棺は桜馬場匹式ならびにIV式土器に共通し、共存する土器片が城ノ越土器に比定できることから、大野原遺跡地は、弥生中期を主体とする広大な埋葬遺跡地であることを確認した。

今回の第3次発掘調査は、第2次調査の継続であるが、主目標は、多量の貝がらが散布し、貝層の堆積が予見される畑地910番地の貝塚調査であった。(図1)

2 調査概要

今回は昭和60年7月22日から8月12日まで実施し、前回同様、発掘調査に当たったのは大野原遺跡調査団(附図)である。調査地は丙910番地(松浦恒俊所有地)約70平方メートルで、第1トレンチから第4トレンチまで4ケ所のトレンチを設定した。

第1トレンチは、I-1からI-3と南北に3 m・4 mを設定。第2、第4トレンチはそれぞれ発掘地の南、北端に地層ならびに、遺物の範囲確認のため試掘坑として設定した。面積は1 m×4 m、2 m×5 mである。

第3トレンチは、第1トレンチに東接し、貝層の中心部を予見して、3m×4mを設け、さらに西に2m×4mを拡張して、3-2とした。(図2)

3、層序

遺跡地の破壊状況は予想以上にすすんでおり、第2トレンチ(試掘坑)を除きすべて がほぼ完全に攪乱され、適確な層序を把握するのは困難であった。第2トレンチのみは 隣地との境界線上に近接したため、掘削機の被害をまぬがれており、一応基本層序を保 っていたと判断してよい。

第2トレンチの層序は、第1層が淡黒褐色の表土で厚さ約10cm、第2層は黒褐色 耕土で約30cm、第3層は赤褐色約40cmで、この地層が弥生文化層にあたる。 第4層は、黄褐色土、約10cmの層を形成、第5層はやわらかい褐色土約30cm、 第6層は、黒色火山灰層で、上部にパミスを含むブロック状の黒帯層が混入する。

第3トレンチには、小規模の貝層約20cmが2層から3層にかけて3-1トレンチの中心部から西南壁にかけて堆積していた。

第4トレンチは 発掘地点の最南端部に位置し、削平のため地層の二次堆積が行われ 第5層が弥生文化層に比定される。

第1~ 第4トレンチの文化層から旧地形を判断するとき、南から北に向けて、2 程度のゆるやかな傾斜をもって台地を形成していたと考察される。

4、遺構・遺物

遺構1

第1トレンチ1号から、南壁に接して土壌墓が検出された(図 3)。土地墓は東西に長楕円形状をなし、長さ約2m、深さ35 cmの舟底型土坑からなるが、坑はトレンチの南壁・西壁にかかつており全形状を確認することはできなかつた

土坑の北縁部中心から西寄りに、高さ30cm・幅15cm程の標石がおかれ、その前の方に標石を囲むように4つのピットが配置されていた。西壁に接するピット深さ約30cmには、供献用と考えられる真ガキ・シシ貝・巻ガイなどがつめられており、貝類にまじつて辺3~5cmの偏平な鯨骨片数点・シカの骨片・魚骨が検出された。

標石の東側には、土坑中心部に向つて、パミスまじりの黒色粘土で固めた台 状の突出地層があり、埋葬に伴なう祭祀遺構と判断される。遺構内から副葬品 は発見できなかつた。

遺構2

1号トレンチ2号では、ほぼトレンチ中央附近に、粘土塊を配置した、土器製作工房祉を想定させるような遺構が出土した。(図4)

この遺構は、第3層最下層の床面を全面的に固め、精製された赤黄色の生粘 土塊を南北に数個帯状に置き、その前部に炉状の浅い坑と柱穴状ピット4穴を 設けている。

炉状の坑内からは焼いた祉が残り、灰土・炭化物が検出され、ピットからは 土器片、石銀が各1点出土した。粘土塊の形状・大きさは多様であるが、大きい ものは人頭大ほどあり、その頂部はくぼみ状を残し造形の跡らしきものをとど めている。焼成前の生土器を想定させるものであつた。

トレンチ内から埋葬遺構は発見されなかつたが、遺構の状況から、粘土塊は 供献用生土器と判断され、葬制にかかわる遺構の一部とみなされる。生粘土に よる即製の供献用土器の使用遺構の検出事例は、近くには後文晩期の原山遺跡 がある。 遗構3

第3トレンチ1~2号にかけて、その中心から再に向け径約3m、厚さ20cm程の貝層が2層下層から3層にかけて推積があつた。その貝層下、東壁にかけて土地 墓状の土坑が出土した。舟底形で東西に向け、長さ約1m、最大幅65cm、楕円状の土坑である。坑内からの副葬品はなかつたが、上層からは炭化物が検出され、底部からは腐触した人骨粉状のものが微量検出された。

この土坑は、大野原遺跡出土の土壌墓に共通し、埋葬遺構とみなしてよい (図5)

同トレンチ西方には、三角状をおびた50×35cm・深さ40cmの土坑があり、 さらにその底部柱穴状ピット2つが並んで発見された。

この2つの土坑を半円状に囲むように計21個のピットが散在し、床面は粘土で平面に固め、住居祉を想定させるものである。

しかし、周辺祭紀遺構の関係からみて、埋葬儀礼にかかわる遺構とも判断 されるが、完掘に至つていないため結論を出すまでには至らなかつた。

貝層とのかかわりを含め、今後の調査に期待したい。

出土遺物はこの第3トレンチがもつとも多く、土器片・石器・装飾品、獣骨など多様にわたつた。遺構はトレンチ周辺に広がる可能性があり、今回の調査ではその全容を検証するには至らなかつた。

遺物

遺物の出土件数は、第:1~第4トレンチまで、総件数で、土器片1355点、石器・石片71点、獣骨11点、貝製品2点、鉄泽7点である。

トレンチ別に見ると、第2・第4の試掘坑から若干の石器・土器片の出土を みたほか、そのほとんどは第1・第3トレンチに集中する。しかし、第1・第 3トレンチは、第3層の文化層までほぼ完全に地層のかく乱がおこなわれ、遺 物の破壊・移動が激しい。第1トレンチ2層から、近代陶磁器片や、中世以降 のものと判断される鉄準等も出土し、第3層貝層からは、末炭化の物4粒が落 ち込みとして検出された。また同トレンチ3層の最下層部から、縄文後期に属する三万田式士器片 1点 が発見されたが、遺跡地での縄文文化層の検出例はなく、何らかの理由による混入としか判断できない。

各トレンチから出土する土器片の特徴は、口縁部下に三角状の隆起帯、若 しくは沈線帯を有し、胴部から底部にかけては刷毛目痕を残している。出土 土器からみて、遺跡地は、弥生中期初頭から中葉期を中心とする埋葬遺跡と 考えられる。

石器は、石鍬数点をふくむ石片で、材質は黒曜石を主体とし、若干の安山 岩質の材質を含む。第3トレンチの3層、炉状土抗周辺から、黒曜石を加工・ 研彫したとも想像される約35センチの半環状の破片が検出された。ちよう どガラス製品のピンの口縁部に似ているが、事例がないため何であるか判断 がつかない。(図/4、247)

その他片刃石斧が2点、第2・第3トレンチからそれぞれ各1点出土した。獣骨はシカの骨片・イノシシの歯が数点、第3トレンチ貝層中から検出されたが骨格器の発見はなかつた。第1トレンチの祭祀遺構ピット内から鯨骨片数点が出土したことはすでに前でのべた。

有孔貝製品が同じ第3トレンチ貝層中から2点、検出したが、いずれも有明 海に産するシシガイを素材とする。中央部に孔をあけ、研磨、加工をほどこ さない、素朴な装飾品である。埋葬にかかわる副葬品とみてよい。

5、結び

大野原遺跡の調査は今次で第3次におよぶが、遺跡面積の規模の広大さに比べ、調査区域は点にひとしく、検出資料も遺跡の全容を解明するには程遠いものである。今回までの発掘調査で、埋葬遺構を主体とする、かめ棺墓、土壌墓、巨石蓋支石墓など数基を発見したが、共伴する土器が城の越口式並びに「V式土器に比定できることから、弥生中期の埋葬遺跡と判断してよい。

しかし生活資料である石器・石鏃・土器片などが、かなり多量に検出されており、埋葬にかかわる副葬品ともとらえがたく、大野原合地一円に広がる

遺跡地に、住居祉、集落を含むが生生活祉が存在することはじゆうぶん予見 できる。

第3トレンチから出土した貝層も、生活祉にかかわる小規模な貝塚遺構であるのか、埋葬にかかる供献用の貝の集積なのかは、現段階では結論を出せない。獣骨片・獣歯・土器片・石器等の投棄のあとも示しており、弥生期の小貝塚的様相もうかがえる。また貝層下に現われた半円状を示すピットも、住居祉の柱穴か、祭祀に附随する遺構なのかも判明できなかつた。今後の調査に期待される。

しかし、埋葬遺構については、かめ棺墓・巨石蓋支石墓・土壙墓など多様 な形態の遺構とともに、祭祀遺構も検出され、弥生期における葬制研究に貴 重な資料を提供した。

同じく弥生中期の埋葬遺跡、景華園遺跡が至近距離にあるが、この遺跡からは、青銅鏡をはじめ、銅剣・銅鉾・豊富な玉類など、弥生文化の特色を示す華麗な副葬品が発見され、島原半島の先進性と大陸文化の影響を示す遺跡地として注目された。大野原遺跡は同時期の埋葬遺跡地であるが、出土する遺物は石器文化を主体とし、副葬品は素朴である。この二つの地域の文化の特徴、性格、立地条件など研究することも今後の課題であろう。

残念ながら、遺跡地の全面的ともいえる破壊進行のもとで、遺跡の保存、 保全策が立てられていない現状下、春・秋二回の午ほう生産による遺跡壊滅 は深刻な段階を迎えており、憂慮せざるを得ない。

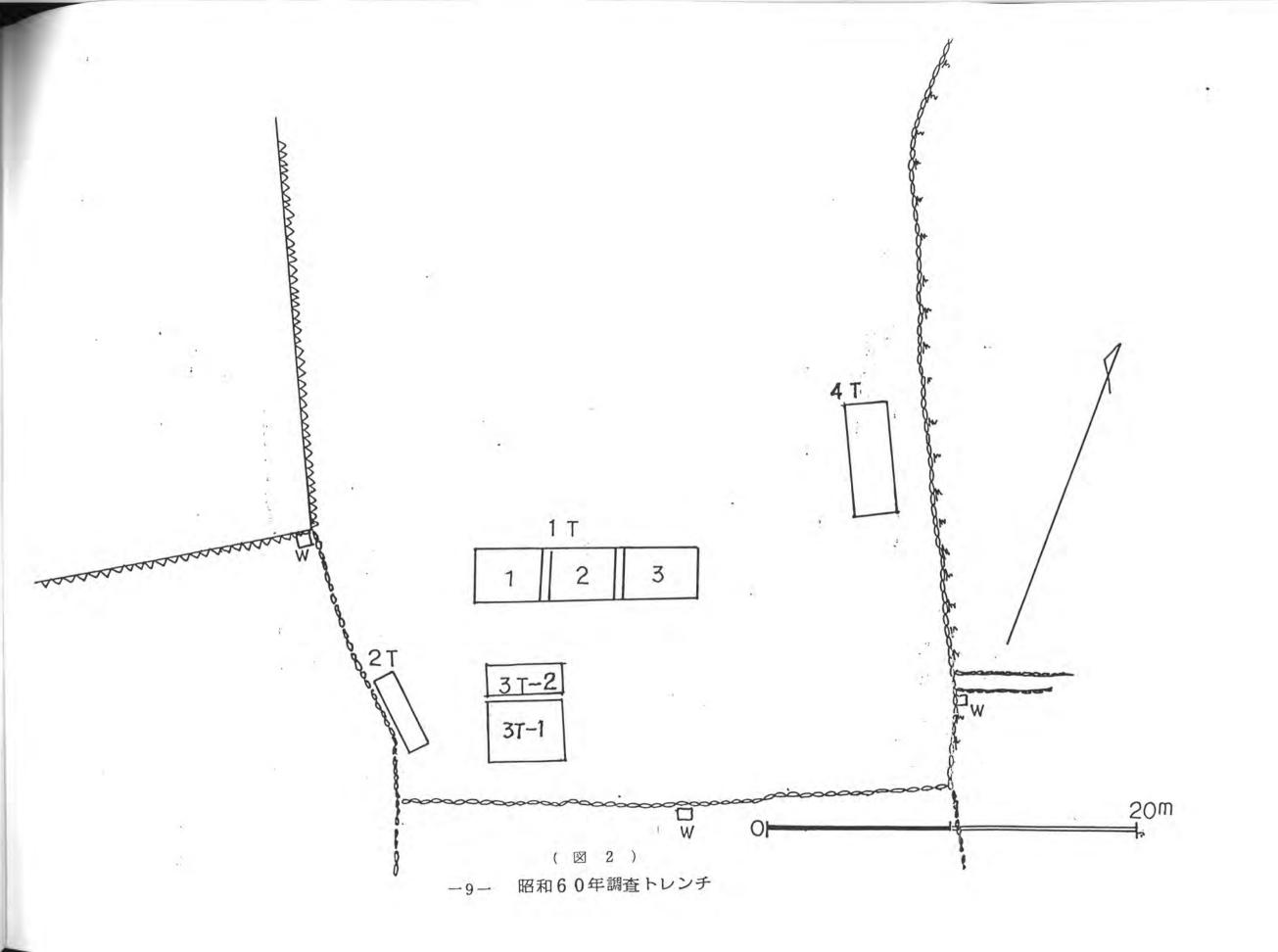
景華園遺跡の破壊は、島原半島の弥生文化の発展、階級分化の形成を知る重要な資料を失つたことになるが、大野原遺跡の壊滅は、生産社会の発展にともなう大規模集落の形成、それにともなう葬制の変化など貴重な調査資料を永久に失なうことになる。今後の緊急な対策が望まれる。

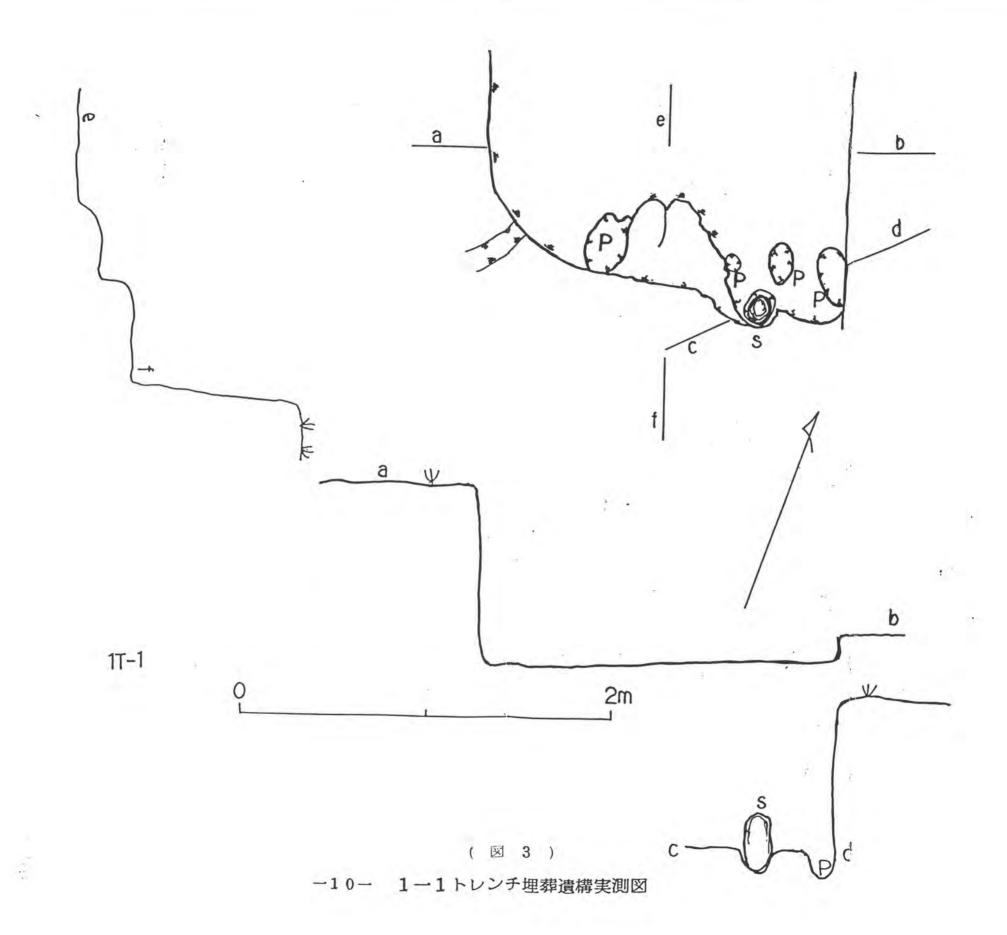
[注] 1、長崎県立国見高校社研部「有明町大野原の研究」

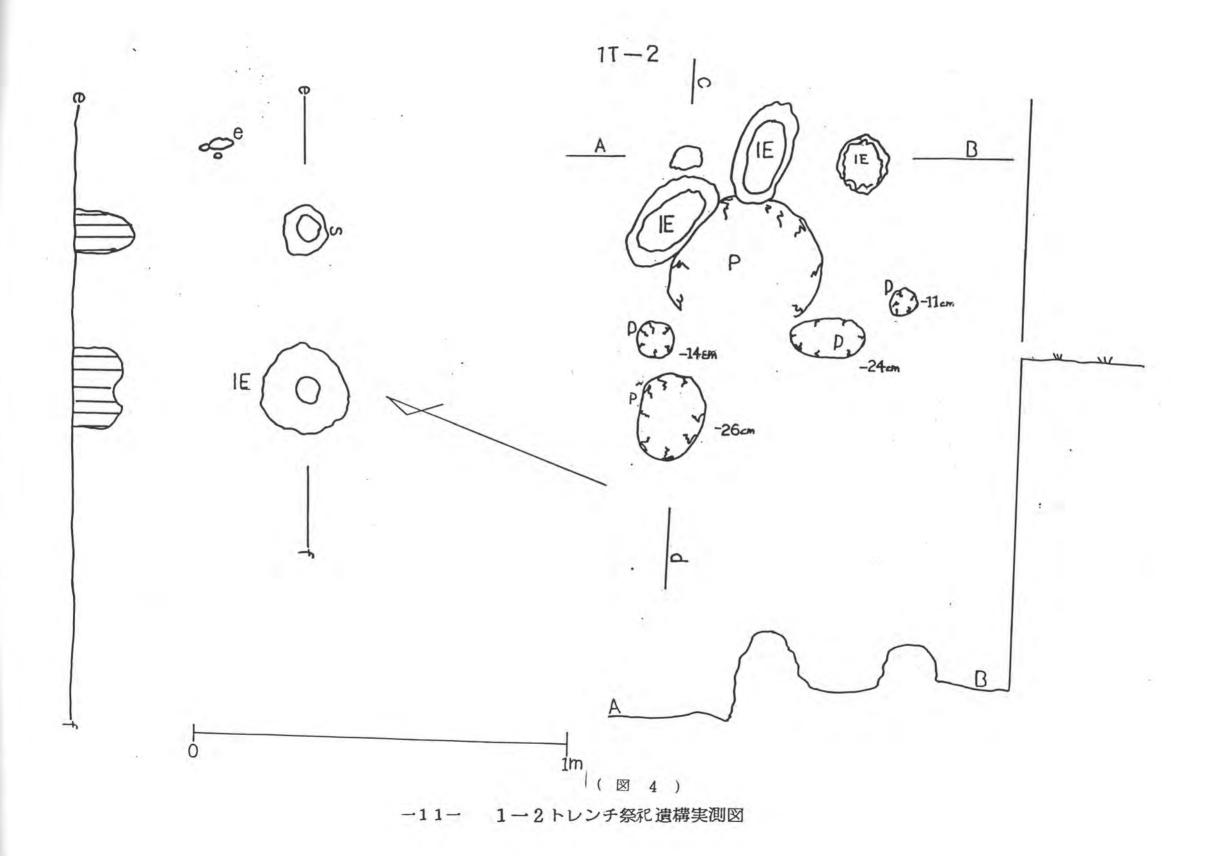
社研部報7号 昭和44年

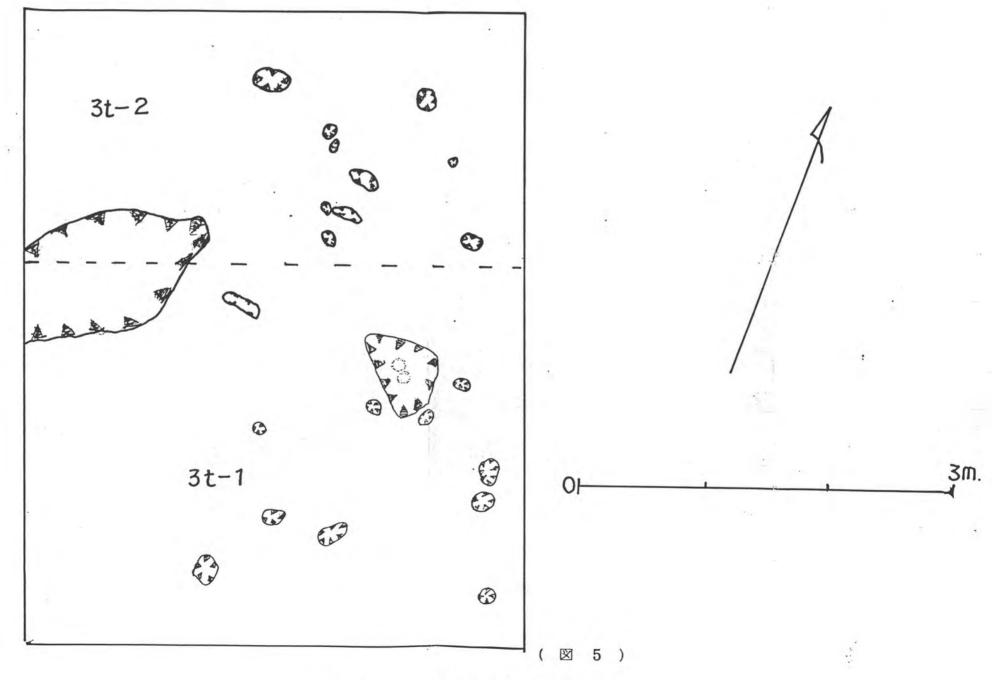
2、有明町教育委員会·大野原遺跡調査団 「大野原遺跡調査概報」 有明町埋蔵文化財調査報告第2号 昭和59年



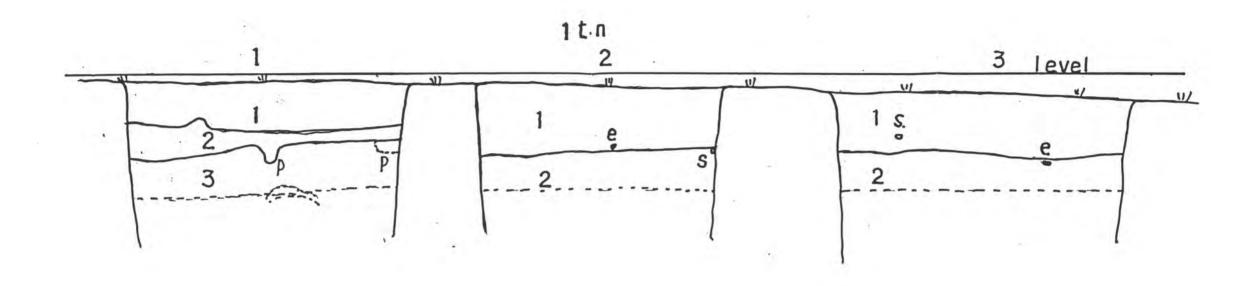








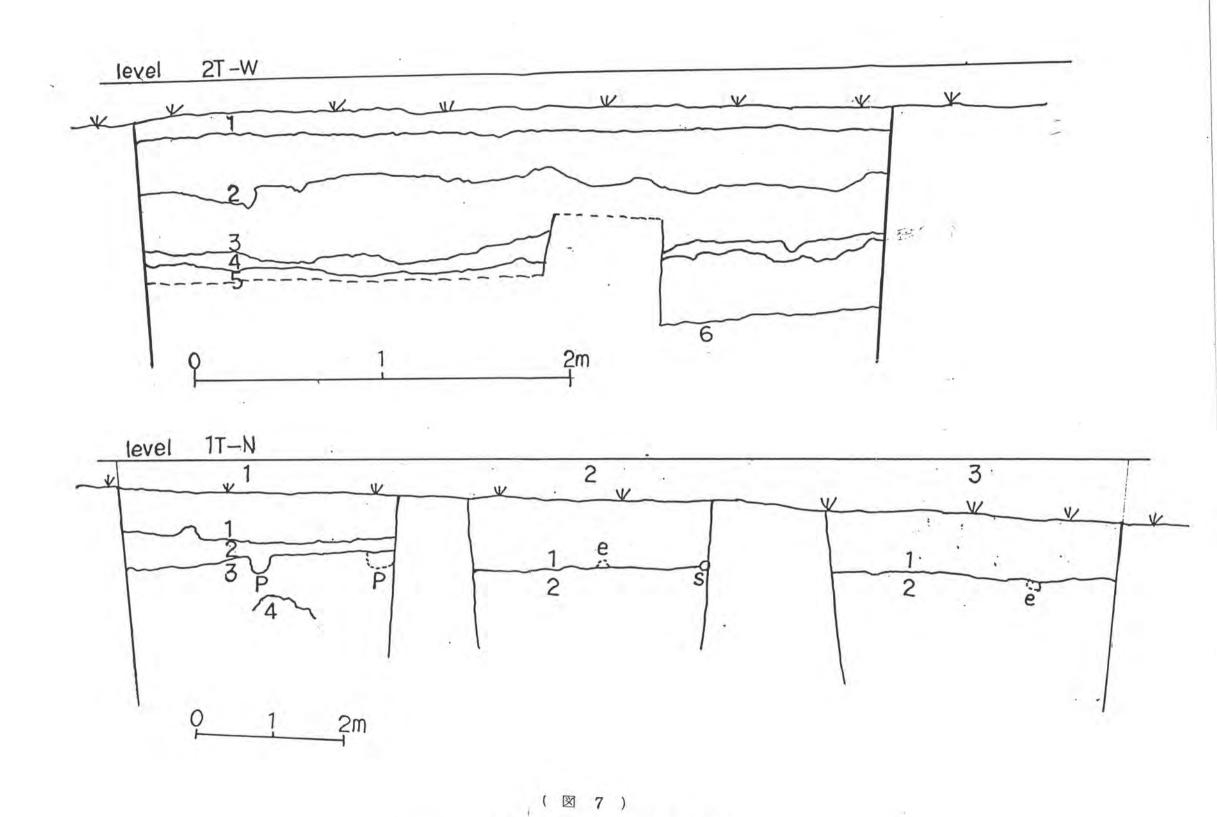
-12- 第3トレンチ遺構



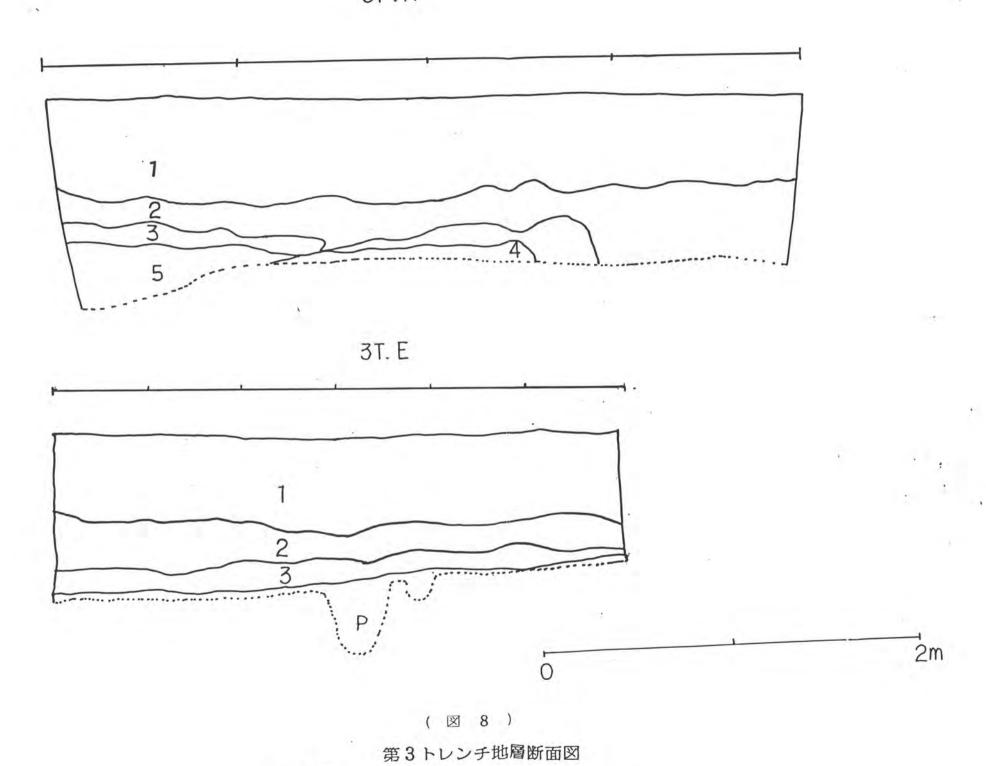


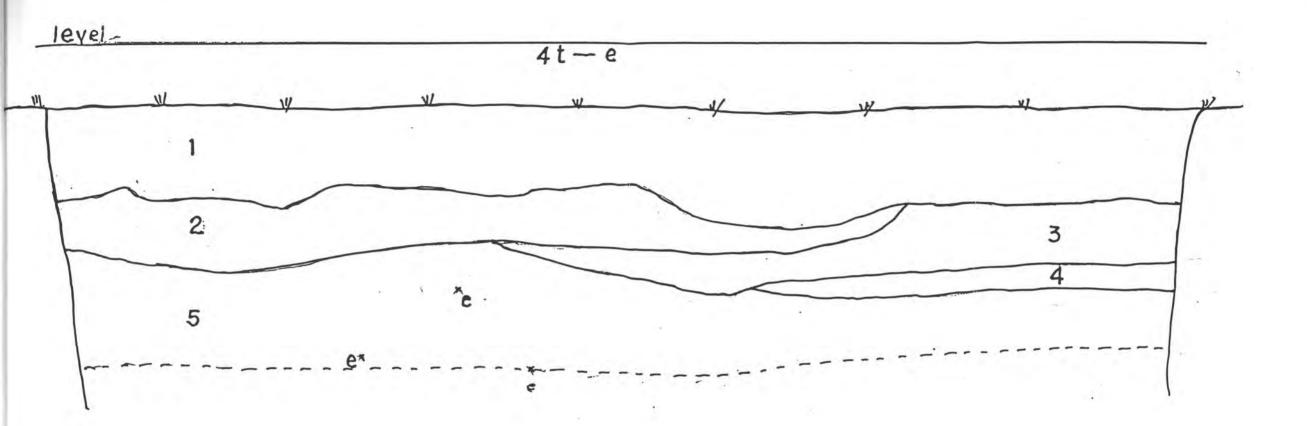
(図6)

ー13ー 第1トレンチ地層断面図



-14- 第2・第1トレンチ地層断面図

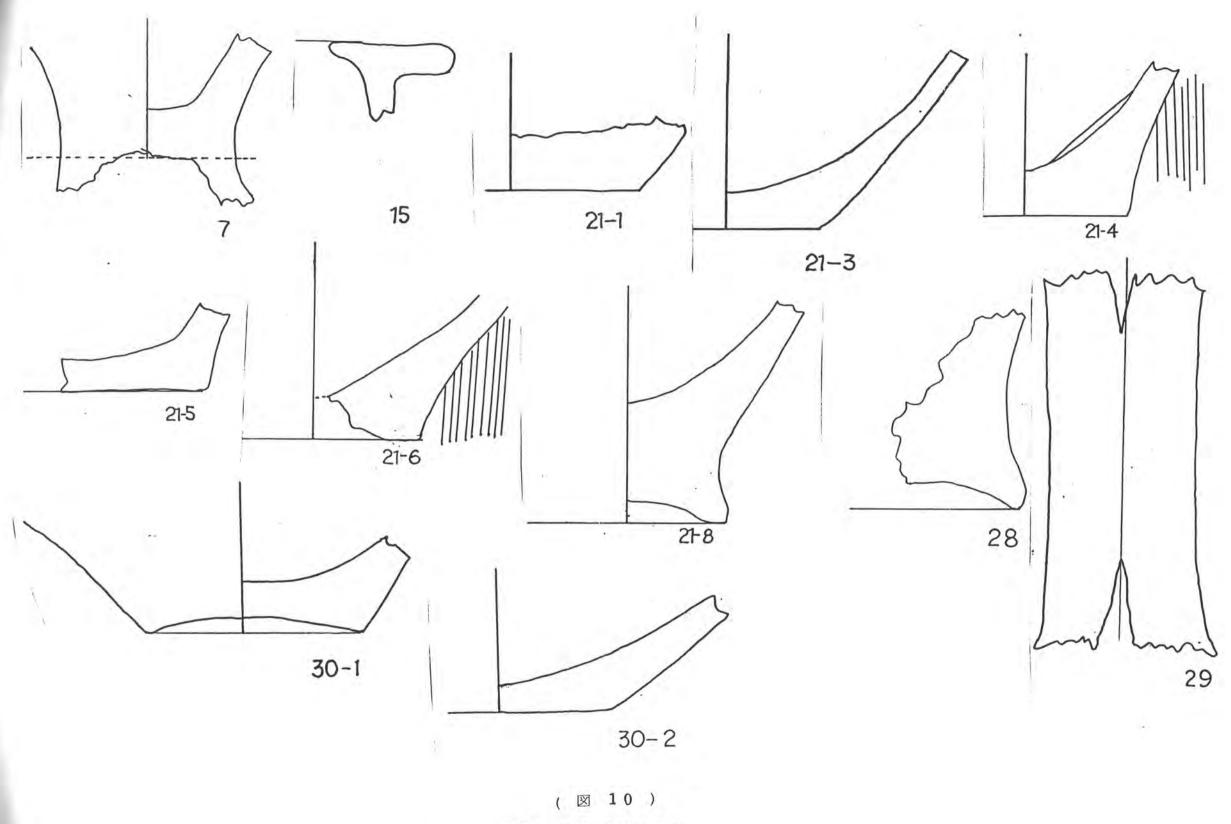




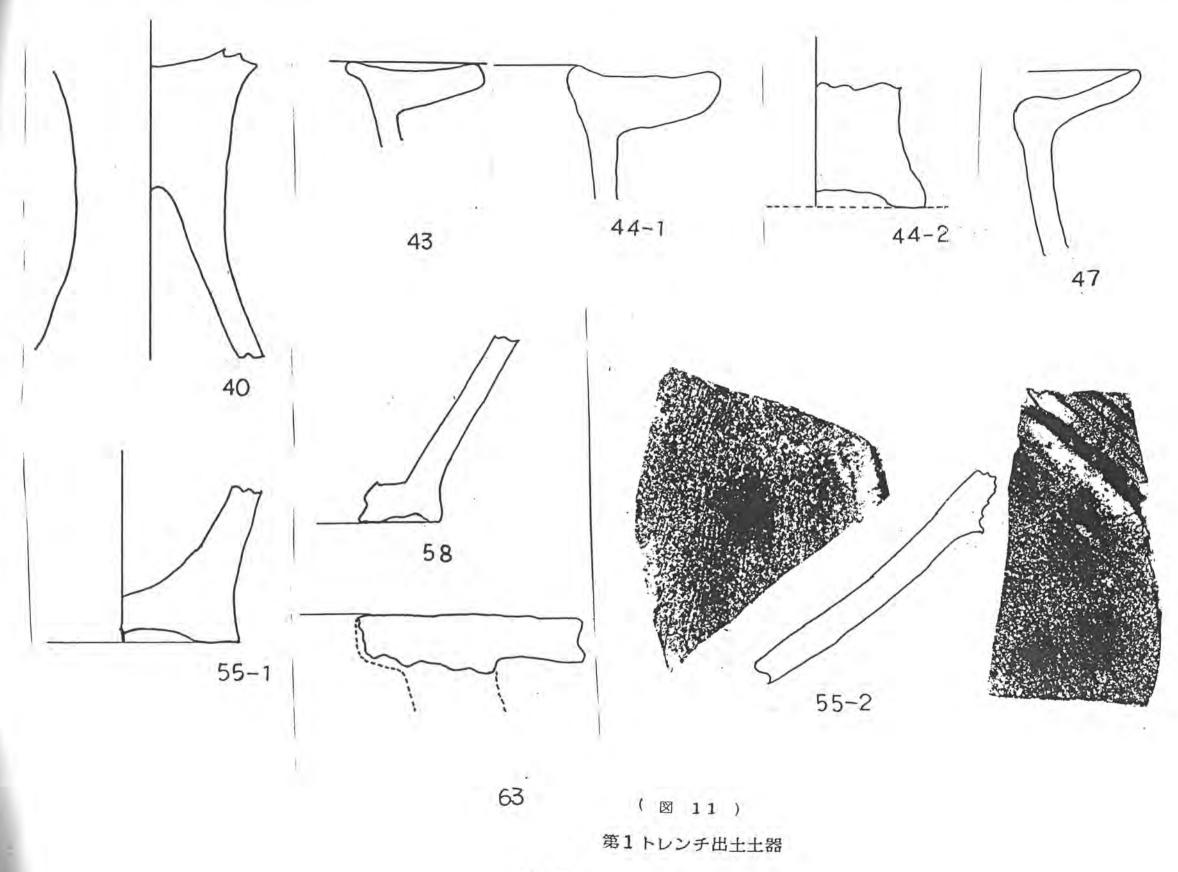


(図9)

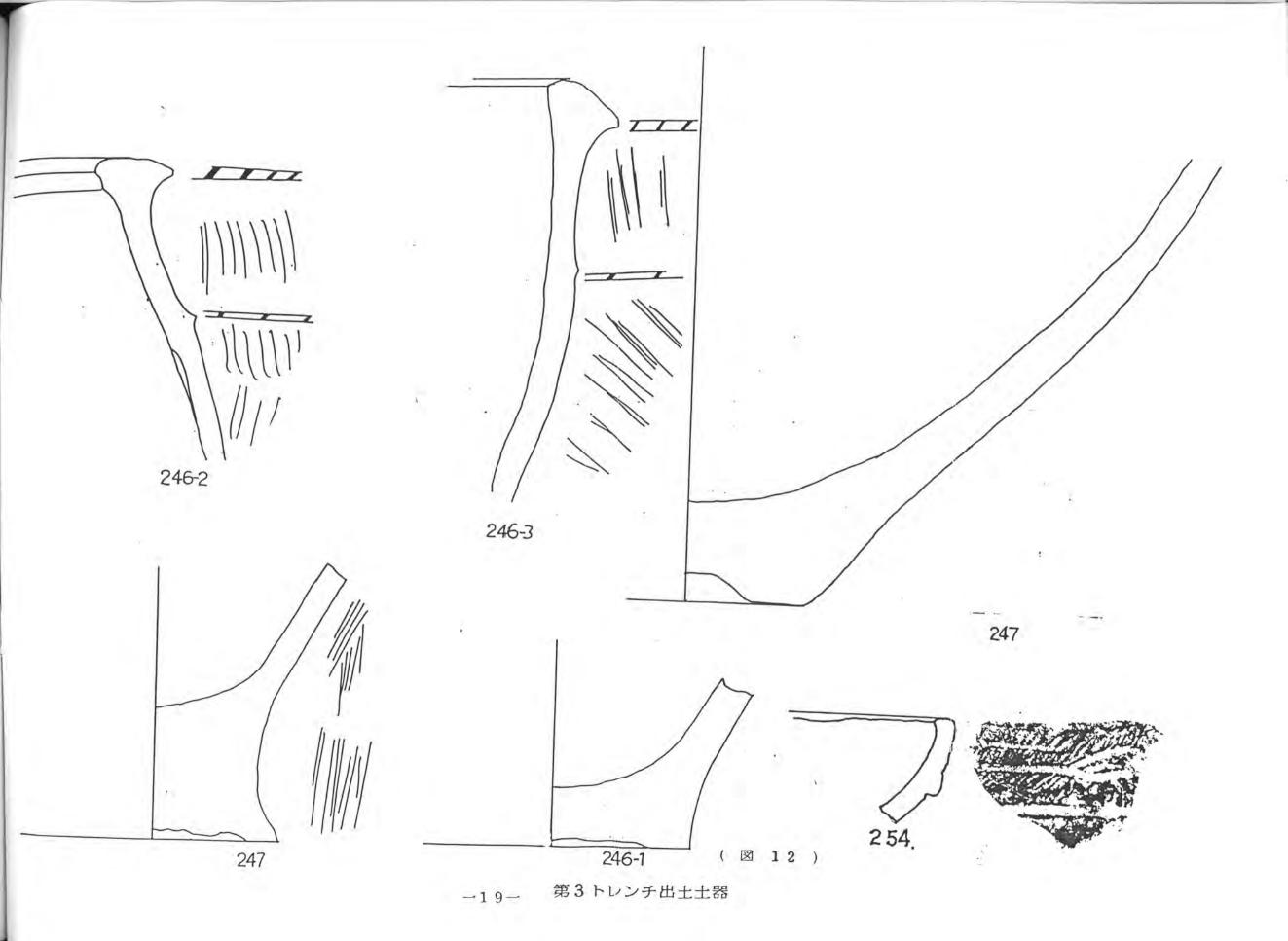
第4トレンチ地層断面図

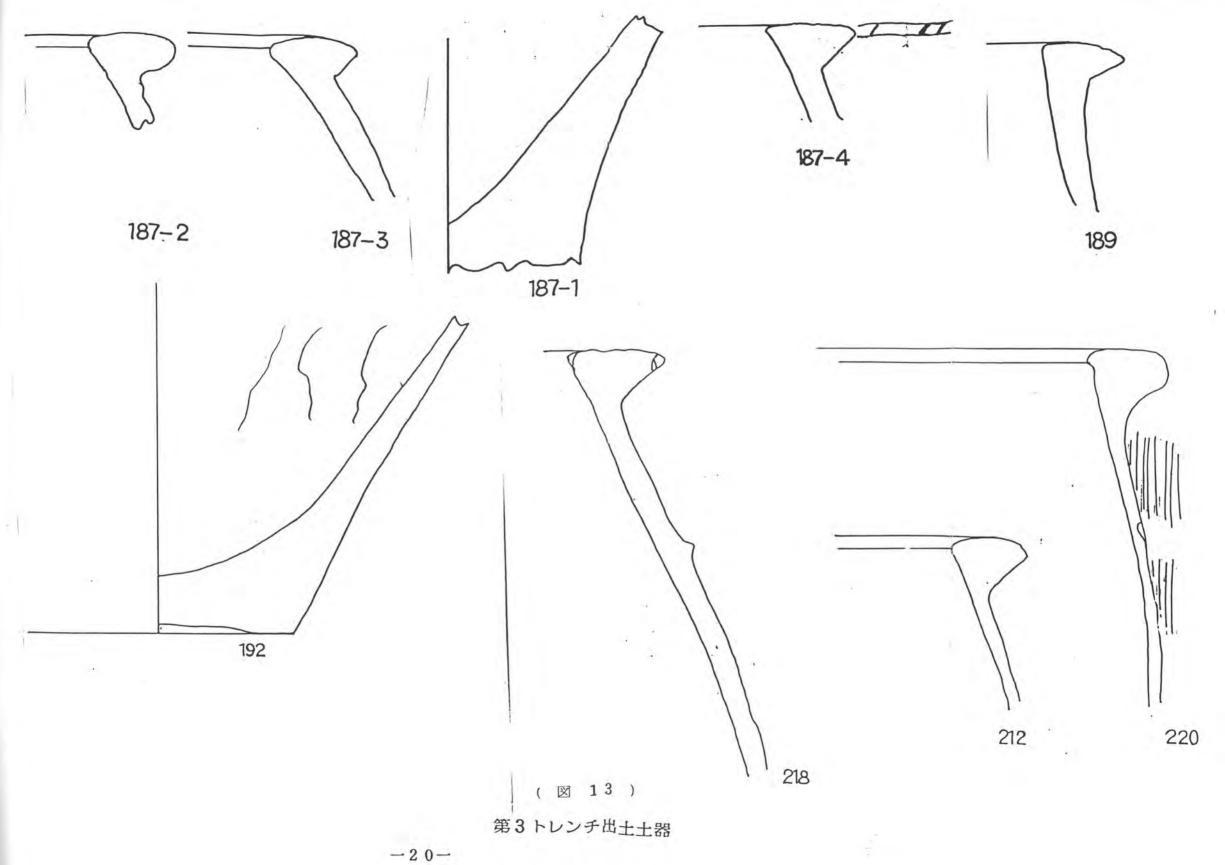


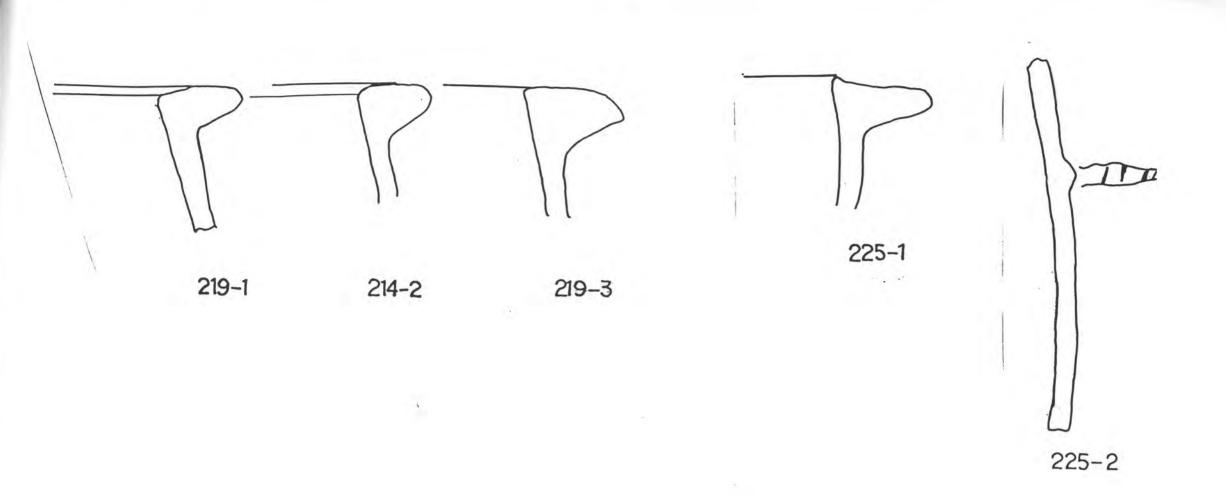
第1トレンチ出土土器



-18-

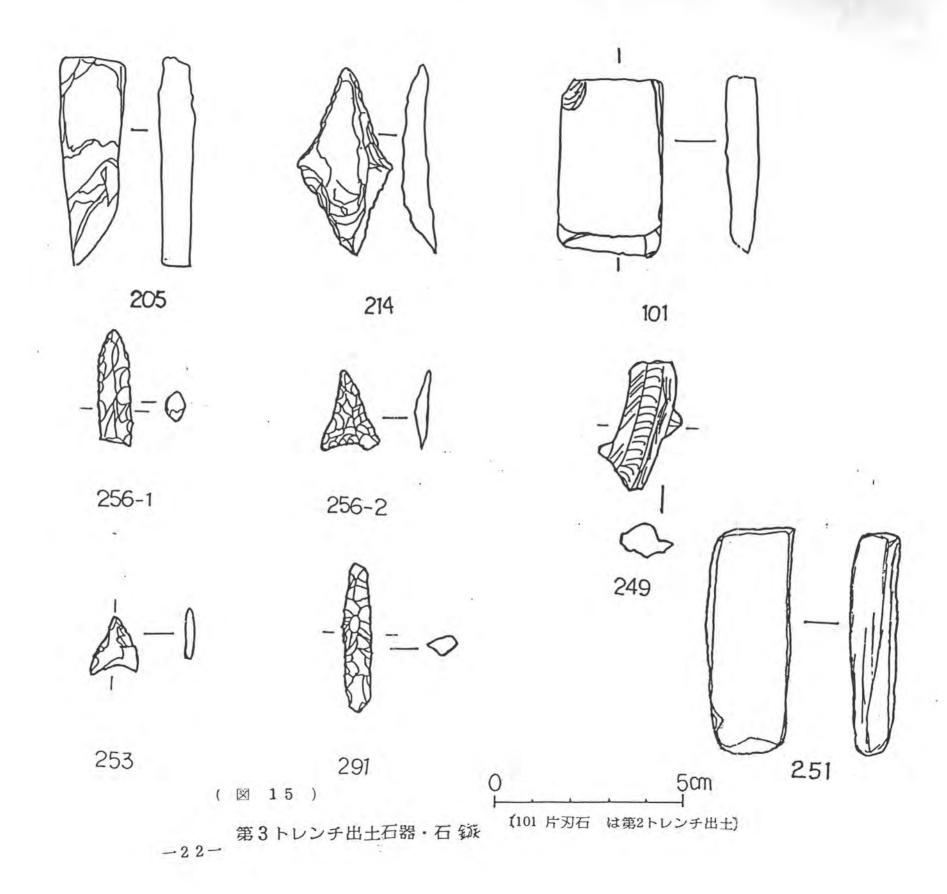






(図 14)第3トレンチ出土土器

:



	氏 名			
調査団長	金子一之(町長)			
副団長	菊池程義 (教育長)			
団員	諫見富士郎 (日本考古学協会々員)			
2	吉田安弘 (島原市文化財審議委員)			
2	伊達秋信(教育次長)			
9	宮川武利 (社会教育主事)			
3	伊藤千代子 (教育委員会)			
調査担当者	古田正隆 (日本考古学協会員)			
国見高等学校社研部員	佐々木弘美. 原田和恵. 馬場浩恵. 末本孝幸. 江崎亮太. 松本昭博.			
	栗原光夫. 赤尾和宏. 山口大助. 島田裕司, 加藤朗子. 森崎友広.			
	吉田信一郎. 堺 正宏. 後藤勇樹. 岩永史彦. 森田浩一郎			
国見高等学校社研部部長	荒木 孝			
有明町教育委員会調査協力者	吉田正富。 佐々木敏士。 田浦 圭。 中村洋司。 金子加代子。			

